



たっくんへ

はじめてのおつかい  
がんばってね!!

。なすのぬかづけ 1ぽん

。お茶 1ふくろ

。牛乳 1びん

。にんじん 1ぽん

みどり鯨 1ひき

うずまきりんご 2こ

きょうは1つだけ  
たっくんのすきなおかしを  
かていいわよ!

ママより。



きらいでも  
ちゃんと  
かうこと!!

あなたは1人でおつかいをしたことがありますか？

これは、ある男の子がはじめておつかいにでかけるおはなしです。



これから入るスーパーのまえで、たっくんはドキドキしながらたっていました。



「ぼく1人でできるのかな・・・？」  
おそるおそるお店に入ってみると・・・



「わああ～・・・」

1歩足をふみ入れたたっくんは、上をみあげてびっくり。

そこには、たっくんが今まで見たこともない世界がひろがっていたのです。



大きなとけい、いろとりどりのたても、まっ青な空にながれるくも。  
そして、はるか上をとんでいるのはふしぎなのりもの・・・。  
たっくんがながめていると、  
「いらっしゃい、ぼうや！」と、声がきこえました。



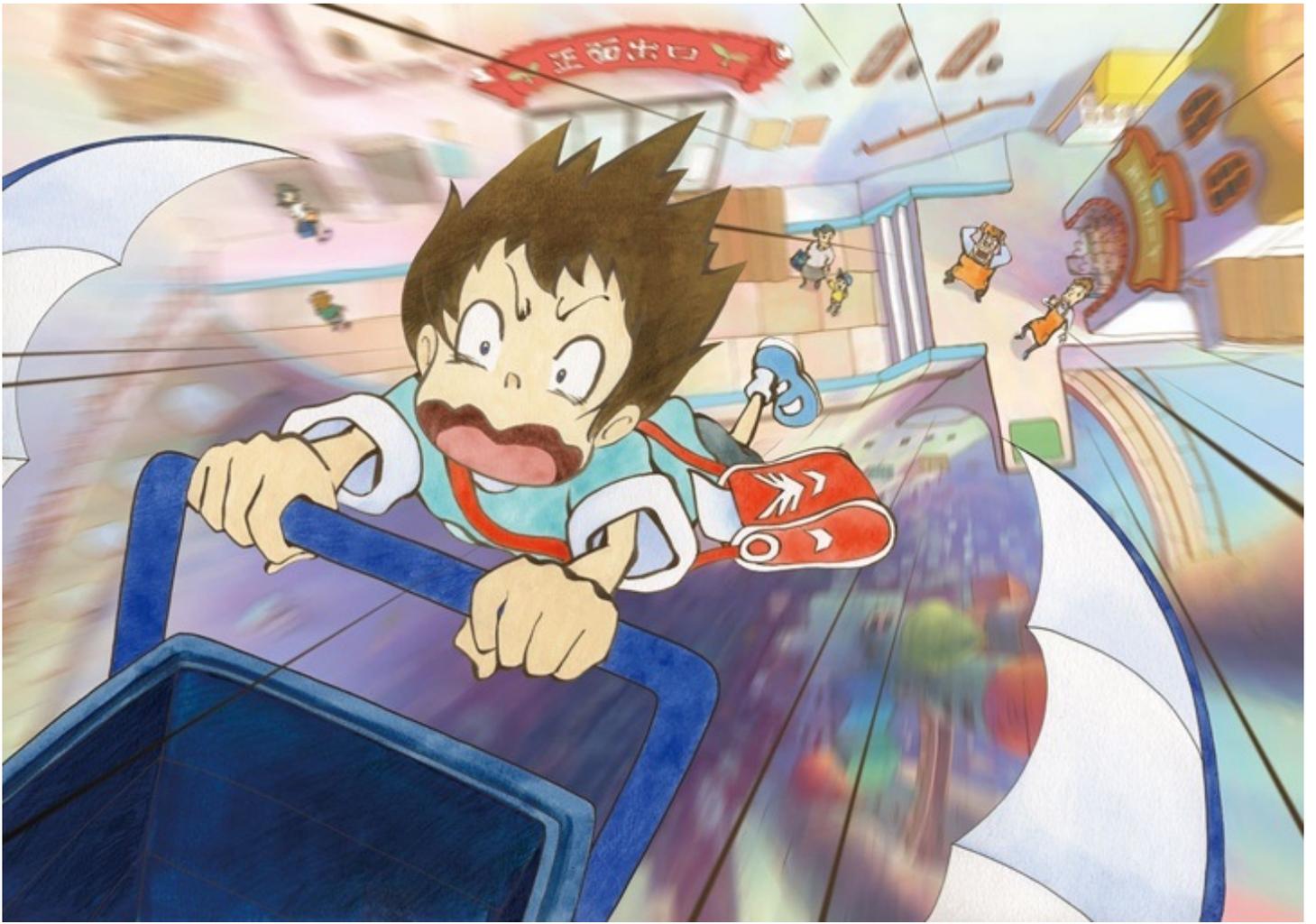
むこうでお店の人がたっくんをよんでいます。

「そうそう、こっち。このスーパーでは、空とぶカートでかいものをするんだ。

おいで。きみに使い方をおしえてあげるよ。」



「さあ、のって。かんだんだよ。ボタンをおしたら出発だ。」  
店のお兄さんが言いました。でも、お兄さんはだいじなことをわすれていたのです。  
「こらっ！スピードがはやすぎるぞ！」  
店のおじさんがさげびましたが、もう手おくれでした。  
お兄さんはボタンをポチッ・・・！



「うわーああああ!!!」  
カートはものすごいきおいでとびだしていきました。





さて、たっくんは何とかスピードをおとせたものの、カートにしがみついて、まだふるえがおさまりません。

すると、どこからかいせいのよい声がひびいてきました。



「いらっしやいらっしやい、ぬかづけはいかがっすかー！」  
向こうのほうで元気よくさげんでいたのは、ぬかづけ屋さんでした。



「あの一、なすのぬかづけを・・・」  
たっくんがぎこちなく声をかけました。  
「へいっしゃい！おう、ボーヤ。1人でおつかいか、たいしたもんだ！  
なになに、なすのぬかづけだな。よっしゃ！おっちゃんがサービスしたろ！」



「どうもありがとう。」

ぬかづけを買い、おじさんにお礼を言って、たっくんは次の店へと向かいます。

「まいどっ！ボーヤの探してるお茶の店ならあっちのほうにあるはずだ。

気をつけていくんだぞ！」



「あ、あった！」  
おじさんの言うとおりに、しばらく飛んでいくと、  
お茶屋さんのかわらやねが見えてきました。



お茶屋さんの店主は、ねじりはちまきのおじいさんでした。

たっくんはここでお茶っ葉を1ふくろ買いました。

それから、ママの手紙にチェックをつけてひと休み。



こうしてスーパーをまわっていくうちに、たっくんはだんだん楽しくなってきました。かべ一面に、お店がずらりとならんでいます。肉屋さん、おでん屋さん、お酒、もなか、かりんとう、うなぎ。そして頭上には、どこかへとつながっている大きなトンネル……。



牛乳屋さんでは、店長のマリーさんがあいそよくいました。  
「あら坊ちゃん、おつかいな？えらいわねえ。  
うちのミルクは世界一おいしいのよ！ママにわたしてあげてね。」



フルーツコーナーでは、天井からうずまきもようのりんごがなっています。  
まるで星のような形をしたくだものもあれば、  
人が上にのれるほど大きなスイカもありました。



魚コーナーはまるで海底のようでした。  
「みどり魚ください。」  
たっくんが注文すると、  
漁師のおじさんは、泳いでいる魚を  
目の前でごうかいにつりあげてくれました。



次にやってきたのは、たくさんのトンネルがならんでいる通りでした。  
たっくんが大好きなおかしコーナーへのトンネルもあるようです。



「えーと、あとは何を買うんだったっけ？」  
たっくんはもういちど手紙を調べました。  
するとのこりは、だいきらいなにんじんと、だいすきなおかし  
の2つだけでした。



「う～ん、どっちにいこうかな・・・？」



「よしっ、おかしコーナーへ行っちゃえ！にんじんはあとでいいや！」  
しかしこの時、たっくんは気づかなかったのです。  
だいじなさいふをおとしてしまったことに・・・。



トンネルをぬけたたっくんは思わず目をかがやかせました。  
そこには・・・



色とりどりのおかしの世界が広がっていたのです！

クッキーやビスケットの道、チョコレートのやね、キャンディのかんばん、ゼリービーンズ、ドーナツにプリン……。

あたり一面があまくて香ばしいにおいでみたさされていました。

そんな中たっくんは、いちばんほしかったおかしのある店へとかけ出しました。



ほら、あたらしいバトルカードだ。キラキラ光るし、すっげー強いんだぜ！」  
男の子たちが集まって話しています。たっくんも行ってみると、ありました。  
だかし屋さん、カードつきのおかしがならんでいます。

「これ、くださいっ！！」  
たっくんは大喜びで、さけぶように言いました。



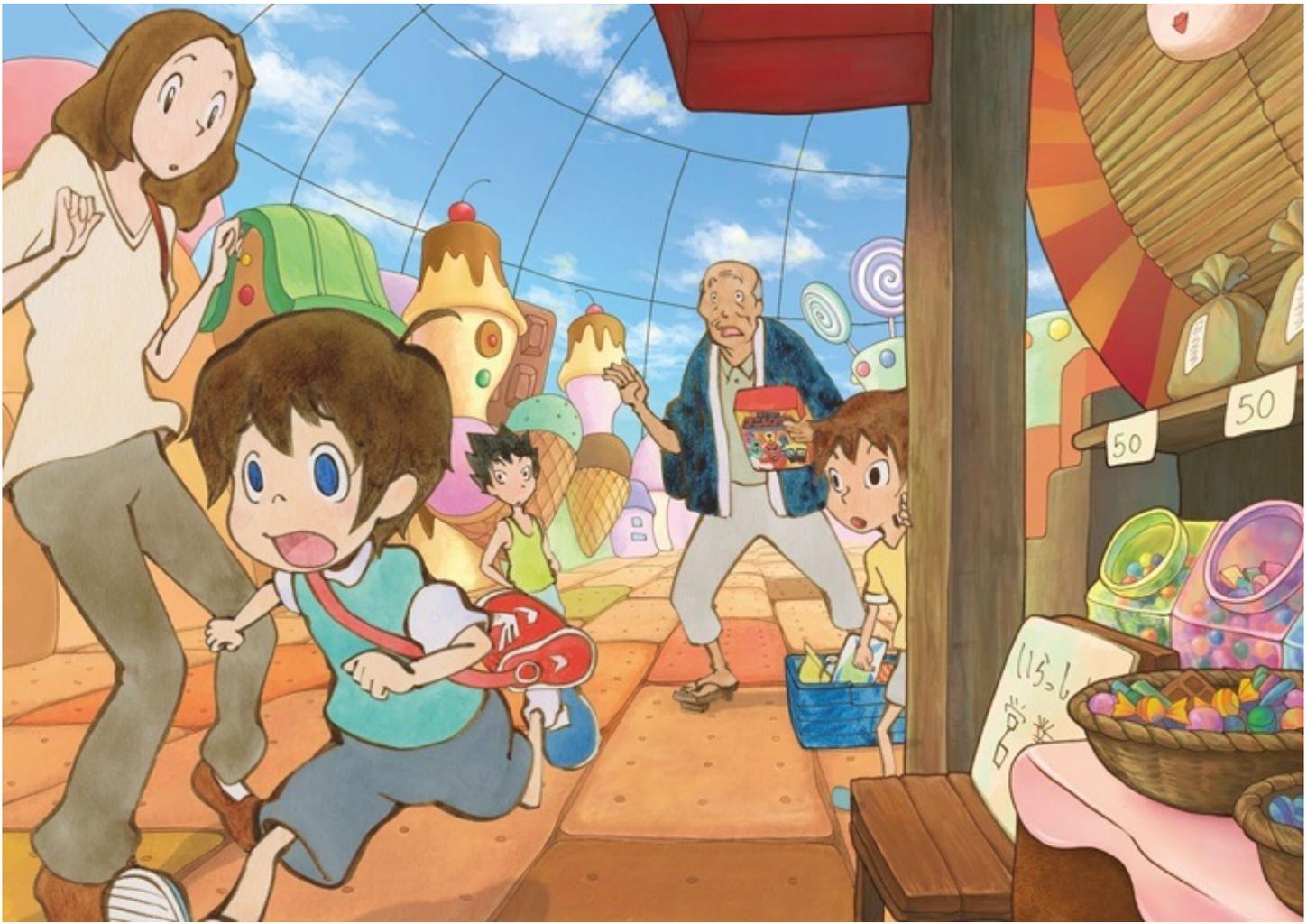
「ほい、1個200円じゃよ」

ところが、お金をはらおうとかばんの中を見ると、さいふがありません。

「あれ？あれれ！？」

どれだけさがしても、さいふは出てきません。

体中から汗がふきだしてきました。



「もどってさがさなきゃ！」

たっくんは大あわてで今来た道を走り出しました。

「これぼうや、どこへ行くんじゃ!？」

おじいさんがよぶのも、たっくんには聞こえません。



しかしトンネルの先で待っていたのは、  
さっきの場所ではありませんでした・・・。



冷たく、生ぐさい空気があたりをじっとりと包んでいました。  
気のせいか、周り中から恐ろしい笑い声が聞こえてくるようです。  
「道をまちがえたのかな・・・もどらなくちゃ」  
たっくんは、か細い声でつぶやきました。



ところが後ろを向いたとたん、トンネルの入り口が音もなく消え失せたのです。  
そして暗闇の中からすがたをあらわしたのは、  
ユラユラとしのびよる黒い影でした。



たっくんはあとざりしようとしてましたが、  
かいだんをふみ外して転げおちてしまいました。  
黒い影は不気味にうごめきながら、みるみるうちに迫ってきます。  
そのとき、はるか遠くにひとすじの光が見えました。



たっくんは影をふりはらい、必死に光へと走りました。  
光はだんだんおおきくなり、ついに、



ぱっと目の前がひらけ、たっくんは目をぱちくりさせました。



そこには、見わたすかぎり、田んぼや畑が広がっていました。  
あたたかい日差しに、小鳥のさえずり。  
やさしい風がふいて、たっくんのほおをなでました。  
下のほうでは、おばあさんが手まねきをしてよんでいます。  
たっくんは、おばあさんに導かれるように畑へとおりていきました。



「おつかいかね？1人でようがんばったねえ」

おばあさんの声をきいたたっくんは、わっと泣き出してしまいました。

「おやおや、どうしたね？」

たっくんはそのままおばあさんのうでの中で、いつまでも泣きつづけました。

おばあさんは、たっくんのもっていた手紙をじっと見て、やさしくほほえみました。



「元気をだして。さあ、これをもってお行き。」

おばあさんはにんじんを1本とりだすと、たっくんに手わたしてくれました。

そして、たっくんの両手をしっかりとにぎりしめました。

「笑顔でお母ちゃんのところへかえるんだよ。」



おばあさんと別れるころには、日はもうかたむきかけていました。  
おばあさんは、出口へつながる扉にたっくんを案内してくれました。  
「さあその扉からお行き。また会えるといいのう。」  
たっくんはおばあさんに何度もお礼をいって、出口へと向かいました。



扉をひらくと、そこは最初にいたスーパーの前でした。  
おどろいたことに、外はすっかり夜になっていました。  
たっくんが目を丸くして見回していると、ひとりの女の人がかけよってきました。



「ママ！」

「たっくん！たっくんだわ！！けがはない！？無事だったの！？ああよかった！！」

ママは半分なきながらたっくんをぎゅっとだきしめました。



こうして、たっくんはママといっしょにスーパーをあとにしました。  
夜空には、たくさんの星がキラキラとかがやいていました。

👉 おわり 👈

